

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006 年度～2009 年度
課題番号：18390593
研究課題名（和文）子どものヘルスプロモーション促進への基礎教育における外来看護実習と
外来看護の構築
研究課題名（英文）Development of Ambulatory Care Nursing Practice in Undergraduate
Nursing Program and Ambulatory Care Nursing for Health Promotion
Of Children
研究代表者 及川 郁子（OIKAWA IKUKO）
（聖路加看護大学・看護学部・教授）
研究者番号：90185174

研究成果の概要（和文）：

本研究は、子どもが自分の身体や健康に関心をもつことができるように、「診察」「吸入」「点滴注射」「血液/採血」「予防接種」について、その理由と実際のやり方などを、実物・モデル教材を用いて外来看護師と看護学生が協働して実施し評価したものである。子どもたち（5歳前後）は緊張しながらも積極的に取り組み、一緒に参加した保護者は子どもに説明することの大切さなどに気付いていた。また、看護学生は補助的に関わりながらも、子どもの様子や健康教育の意味について理解を深めることが出来ていた。これらの結果などをもとに、外来看護師が行う子どもたち向けの健康教育プログラムの具体的提案や、看護学生の外来実習の方法について検討した。

研究成果の概要（英文）：

In the present study, ambulatory care nurses and nursing students collaborated using actual subjects and models as teaching aids to practice and assess the actual procedures and reasons for physical examinations, inhalations, intravenous drip injections, blood sampling, and vaccinations, so that children are able to take an interest in their own bodies and health. Although tense, the children (approximately 5 years old) actively involved themselves, and the parents who participated alongside became aware of the importance of providing explanations to children. In addition, the nursing students were able to gain a better understanding of children's demeanor and the significance of health education as they assisted the procedures. Based on these results and other data, consideration is given to a detailed health education program proposal targeting children which ambulatory care nurses may put into practice as well as practical training methods in outpatient care for nursing students.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,200,000	0	5,200,000
2007年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
年度			
総計	14,600,000	2,820,000	17,420,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：小児看護学・外来看護・ヘルスプロモーション・子ども・看護基礎教育・実習看護プログラム・実践評価

1. 研究開始当初の背景

近年の医療の高度・複雑化とともに、医療サービスに対する保護者の認識の変化は、子どもの医療サービスのあり方に大きく影響を及ぼし、いかに質の高いケアを提供するかが問われている。そのような中で子どものヘルスプロモーションを高めるケアの必要性が言われているが（健やか親子21）、それに向けた看護の構築はいまだなされていない。

これまでの小児看護に関する研究においては、慢性疾患を含め子どもたちのヘルスプロモーションを高めるには、外来の看護師がイニシアチブをとって保護者とともに子どもの健康促進者となることが、より必要であることが明らかになっている。

一方、看護基礎教育においては、少子化や入院期間の短縮により入院病棟での実習が難しくなっており、子どもがケアされている現状に即した教育が行われているとは言い難い状況にある。そのため学生が卒業後、外来への配置に戸惑いをもち、外来看護の重要性ややりがいを見出すことを難しくしている。また従来の研究からも外来看護に対する看護師の役割については課題となっており、継続

教育の重要性も示唆されている。

このような状況から、本研究は教育と実践の連携を基盤として、子どものヘルスプロモーション促進に向けて、看護基礎教育における外来看護実習のあり方と、外来看護の役割について検討するものである。

2. 研究の目的

本研究は看護基礎教育を行っている大学と小児外来をもつ臨床現場が連携して研究体制を組織化し、看護基礎教育の学生と看護師が協同して行う子どものヘルスプロモーション促進に向けた看護プログラムを開発実践し、看護基礎教育における外来看護実習の位置づけを実習カリキュラムの側面から明確にするとともに、子どものヘルスプロモーションに向けた外来看護の役割を検討することを目的とするものである。具体的には、以下の目標を明らかにする

- (1)子どものヘルスプロモーション促進のための現状や課題について明らかにする。
- (2)子どものヘルスプロモーションに向けた看護プログラムを開発し、看護基礎教育の学生と看護師が協同して実践することを通し、受益者である子どもや保護者の立場から評価する。

また、学生が看護プログラムを外来看護師と協同して行うことの効果を教育的側面から評価する。(3)看護基礎教育における小児看護学の外来実習のあり方について検討する。

3. 研究の方法

(1)小児の外来看護実習に関する基礎調査ならびにフォーカスグループインタビュー

①教育機関調査：看護基礎教育の小児看護学を教授している大学144校（回収数：82校）への外来看護教育への取り組みに関する質問紙調査と、小児看護関連の外来実習担当者11名への外来実習に関するフォーカスグループインタビュー調査。

②医療機関調査：外来小児看護学実習受け入れ医療機関630施設（回収数：314施設）に外来の現状と実習機関との連携に関する質問紙調査と、実習受け入れ医療機関の看護師15名への実習内容・課題等に関するフォーカスグループインタビュー調査。

(2)看護プログラムの開発と実践評価

①プログラム内容：外来の日常的な診察、処置場面などを取り上げ、子どもを主体とした健康教育を実施する中で、子どもが安心して診療を受けることができる、子どもが身体に関心をもつ、子どもにとって外来が健康作りの場として身近に感じられる、保護者が子どもの能力に気付くことができる、などを目的に、「診察ってなに」「吸入ってなに」「点滴ってなに」「血液/採血ってなに」「予防接種ってなに」の5つの看護プログラムを開発した。子どもの発達レベル、知的好奇心への刺激となるよう可能な限り実物などの使用、エプロンシアターやポップアップ絵本、Flashムービーなど取り入れ、40分の内容とした

②対象と実施方法：対象は5歳前後の子どもとその保護者5組程度とし、実践する看護師1名とその補助をする看護学生1~2名として、5か所の医療機関で実施した。

予防接種プログラムは、幼稚園5歳児10名と担任教諭を対象として幼稚園3か所で実施した。

③評価方法：プログラム実施の評価は、実施中の子どもの反応等の観察記録、一緒に参加した子どもの保護者や幼稚園教諭へのインタビュー調査、プログラム実施者の実施直後の振り返り記録、補助者として参加した看護学生の記録、を分析した。また、参加した子どもの保護者にプログラム前後の変化を確認するため、プログラム開始前、プログラム実施後1ヶ月、プログラム実施後3ヶ月間の受診時またはプログラム内容経験時の3回の質問紙調査を実施した。

(3)看護基礎教育における小児看護学の外来実習内容の検討

看護基礎教育における小児看護学の外来実習内容の検討をするにあたり、(1)の調査結果をもとに文献検討を加え、小児の外来看護実習内容の基礎資料を作成した。その資料について日本外来小児科学会年次集会ワークショップを活用した検討会を2回実施後、大学179校と医療機関169か所に活用性の調査を実施した。

*本研究の実施に当たっては、全過程において研究代表者や当該研究実施機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1)小児の外来看護実習に関する調査結果

質問紙調査、フォーカスグループインタビュー調査などから、医療機関・教育機関とに共通した問題として、「実習目標のとらえ方の違い」「外来指導體制の不十分さ」「連携の不十分さ」などが挙げられた。これまでの外来看護の調査結果から外来看護の役割と重要性は見直される傾向にあるものの、外来は人員の確保などの問題を抱えている現状も推測され、外来においてより効果的な教育を

実現するために、教育として教育目標や方法を吟味し、外来との連携を図りながら、外来での具体的な教育方略を検討していくことが課題と考えられた。これらの結果をもとに、以下の看護プログラムの実践評価、小児看護実習内容の検討を実施した。

(2) 看護プログラムの実施評価

5 大学に所属する研究者と 5 医療機関の看護師らと研究協力体制を作り、子どものヘルスプロモーションに向けた 5 つの看護プログラム、「診察ってなに」「吸入ってなに」「点滴ってなに」「血液/採血ってなに」「予防接種ってなに」を実施した。

① 子どもの反応：3 歳～8 歳まで計 76 名（医療機関で実施した 4 つのプログラムには 47 名、幼稚園で実施した「予防接種ってなに」には 29 名が参加）の子どもが参加した。

参加した子どもたちは、医療機関であることや何をされるかという緊張からはじめのうちは表情も硬かったが、次第に緊張も和らぎプログラムに集中し、積極的に参加していた。これまでは、医療機関に来ると“やられる”体験のみであったものが、実物を活用して保護者に聴診したり、咽頭をのぞいてみたり、採血や点滴のまねをしてみるなど“やってみる”体験を通して、子どもたちなりに身体のことや処置の意味を理解していた。また、理解したことはすぐに忘れるのではなく、実際の診察や処置の体験時に思い出して行動をしており、今回のプログラムが嫌な体験に終わることがないものとなっていた。保護者に行った質問紙調査からは、プログラム実施後に実際の診察や処置を体験した子どもたちは、「診察に協力するようになった」「食欲の状態を具体的に伝えることができるようになった」「ヒューヒューしていたらシューシュー（吸入）いく」「シューシューしたら

太いストローになる？（気管支が拡張して呼吸しやすくなること）」「痛くともがんばる（予防接種のとき）」などの子どもの変化が記載されていた。

今回、対象として呼びかけた子どもの年齢は 5 歳前後であったが、3 歳から 8 歳までの子どもが参加した。3 歳児は「診察ってなに」に参加しており、医療機関への通院が多い幼少期にこのようなプログラムへの参加の機会は、以後の医療機関との関係や自分の身体に関心をもつ重要な場となると考えることができた。7 歳・8 歳の子どもは、「血液/採血ってなに」に参加した。はじめは 5 歳児に実施したが、子どもの反応から難しいようであったため、急遽小学校低学年に呼びかけた。子どもたちは関心をもって血液の説明を聞き、出血や感染などの身近な健康問題とともに理解することができていた。採血については 5 歳児でも十分に理解可能であった。これらのことから、今回実施したプログラムは、プログラムの媒体や説明の仕方を工夫することで、対象に幅を持たせた実施が可能であることも示唆された。

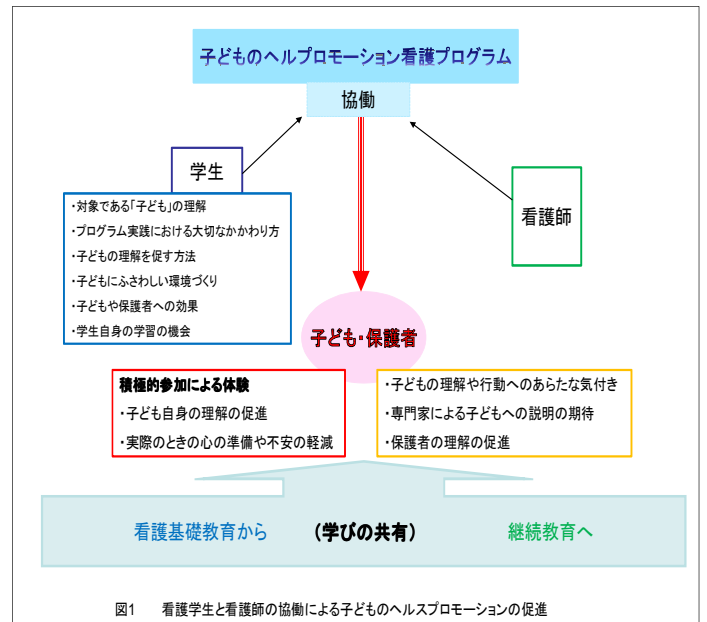
「予防接種ってなに」は、幼稚園に場を移して行った。子どもたちが日常的に生活している場を選んだことは、子どもの緊張感を和らげ、より積極的な参加に繋がっていた。また、看護師が出向いて看護師のユニホームで行ったこと、看護師の仕事について問いかけたことなどは、子どもへの医療への関心の手がかりになっていくことが期待できた。今回の機会を通し、どのような内容をどのような場で実施するか、またどのような時期や機会に実施することが子どもたちにとってより効果的であるのか示唆を得ることができた。

② 保護者の反応：共に参加した保護者にとっては、身体や処置のことを正しく理解する機会となっていた。「専門家が話すことで子

もの興味や学びが多い」「子どもなりに理解するとがんばれることがわかった」など、これまでも保護者なり理解し子どもに説明してきた内容もあったが、それをより正確に伝えることやわかりやすく伝えることの難しさを学んだり、専門家からの子どもへの説明への期待などにも繋がっていた。また、アレルギーの話や学校での健康教育など保護者からは他のプログラムへの期待も聞かれ、保護者自身の健康や身体への関心の広がりを見せていたものと思われる。

③看護学生の反応：看護学生は、医療機関で実施した4プログラムに20名が参加した。参加した学生の記録から内容分析を行った結果、8 カテゴリーと23 サブカテゴリーが見出された。8 カテゴリーは、「対象である子どもの理解」「プログラム実施における大切な関わり方」「子どもの理解を促す方法」「子どもにふさわしい環境づくり」「子どもへの効果」「保護者への効果」「プログラム参加による学生の学習効果」「プログラム実現に向けての可能性」であった。学生は、看護師が実施するプログラムに補助的に参加しながら子どもや保護者の言動を観察する中で、外来という場での子どもの理解やヘルスポモーションに向けた看護プログラムの意義を見出しており、短時間の中での学習効果があることが明らかになった。参加した学生の中には、小児看護学の講義や学内演習のみが終了した学生、実習まで終了した学生が混在していたが、外来での実習や関わりを経験した学生はいなかった。学生はほとんど練習する時間もなく実施する看護師のリードのもと一緒に参加することで、子どもや保護者、看護師の関わりを意味づけられており、看護師による教育的関わりが重要なポイントであると考えられた。このことは、実践共同体的学習ともいえる。今回の研究では、設定さ

れた場面で実施したこと、通常の看護外来の業務と切り離して実施することに限界があり、今後、看護師の通常の業務の中にどのように位置づけ、看護学生と協働のできるかが課題である。



(3) 看護基礎教育における小児看護学の外来実習の検討

基礎調査、ヒアリングなどを通し、12領域101項目の「小児看護外来実習内容」を作成した。12領域は、「受付」「問診・予診」「計測・測定」「診察」「与薬」「指導」「継続的関わり」「検査」「処置」「疾病・状況」「救急」「健診」「予防接種」「環境」「広報」「電話」「夜間・休日診療」「地域連携」「記録」「スタッフ」「外来看護全般」「倫理的配慮」である。医療機関、教育機関に活用性について調査した結果、より医療機関のほうが活用性が高い傾向にあった。この実習内容は、医療機関と教育機関の共通のコミュニケーションツールとして活用し、お互いに学生の学びを共有する手掛かりを与えることができるものである。また学生にとっては、外来看護の役割の幅広さが見える。手掛かり

を通しながら、さらにカンファレンスなどで学生の学習を強化し、外来での学びの基盤を作っていくことで、看護師・学生の協働による子どものヘルスプロモーションに向けた外来看護を構築していく方策に繋がっていくと考える。

(4) 今後の課題

看護プログラムの更なる開発と対象年齢に応じた実践教材や方法の検討を進め、外来看護師と看護学生による協働実践を外来に根付かせていくことが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①及川郁子、長谷川桂子、濱中喜代、川口千鶴、ワークショップ外来看護の検討(その3)、外来小児科、査読無、12:4, 2009、p581

②及川郁子、長谷川桂子、濱中喜代、川口千鶴、ワークショップ外来看護の検討(その2)、外来小児科、査読無、11:4, 2008、p490

③及川郁子、長谷川桂子、濱中喜代、川口千鶴、ワークショップ外来看護の検討(その1)、外来小児科、査読無、10:4, 2007、p440-441

[学会発表] (計 6 件)

①吉川佳孝ほか、子どものヘルスプロモーション促進に向けた外来での看護プログラム「吸入ってなに」の実践、日本小児看護学会第20回学術集会、2010(発表予定)

②築瀬順子ほか、子どものヘルスプロモーション促進に向けた外来での看護プログラム「点滴、採血ってなに」の実践、日本小児看護学会第20回学術集会、2010(発表予定)

③及川郁子ほか、子どものヘルスプロモーション促進に向けた外来での看護プログラム「診察ってなに」の実践、日本小児看護学会

第19回学術集会、2009

④川口千鶴、及川郁子、濱中喜代、長谷川桂子、小児看護学における外来看護に関する基礎教育の現状と課題、日本小児看護学会第17回学術集会、p159、2007

⑤長谷川桂子、及川郁子、濱中喜代、川口千鶴、小児看護学における外来実習受け入れ病院・診療所の外来看護の現状と課題、第54回日本小児保健学会講演集、p242、2007

⑥濱中喜代、長谷川桂子、及川郁子、川口千鶴、小児看護における外来実習受け入れ病院・診療所の教育支援の現状と課題、第54回日本小児保健学会講演集、p243、2007

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

及川 郁子 (OIKAWA IKUKO)
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：90185174

(2) 研究分担者

濱中 喜代 (HAMANAKA KIYO)
東京慈恵会医科大学・医学部・教授
研究者番号：70114329

(H20→H21 連携研究者)

川口 千鶴 (KAWAGUCHI CHIZURU)
自治医科大学・看護学部・教授
研究者番号：30119375

(H20→H21 研究協力者)

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

長谷川 桂子 (HASEGAWA KEIKO)
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：80326107

山本 美佐子 (YAMAMOTO MISAKO)
四日市看護医療大学・看護学部・教授
研究者番号：1025882